学生海外調査研究	
クリスチャンコミュニティの舞踊活動における動きのアイデンティティ形成 —International Christian Dance Fellowship の活動を事例として—	
河田　真理	比較社会文化学専攻
期間	2009 年 7 月 10 日～2009 年 7 月 21 日
場所	イギリス（St Andrews）
施設	St Andrews University

1. これまでの研究経過

筆者の研究の中心テーマは舞踊の「聖性」にある。これまでに、クリスチャンコミュニティにおいて行われている舞踊活動に着目し、そこに生起される現象とダンサーの内面性を見つめることにより、その現象が成立するための方法論、当事者の舞踊理念、舞踊活動による意識変容について検証を行い、舞踊の「聖性」について考察を行ってきた。

クリスチャンの舞踊活動に関する学術的研究は我が国では見られず、国外でもキリスト教会における舞踊の歴史やその形態について扱ったものが主であり、そうした「外側から」の視点に加え、舞踊活動におけるクリスチャンダンサーの霊性や意識変容といった「内なる」経験に着目した学術的研究は稀である。そこで、筆者は以下のように調査を行ってきた。

まず、現在クリスチャンによる舞踊活動が盛んに行われている欧米の 2 件の事例について現地調査を行った。 1 件目は、2007 年 5 月、Glory Christian Fellowship International （以下、GCFI と略記）というロサンゼルスにあるアフロアメリカ系プロテスタント教会へ赴き、そこで行われているワーシップダンス（註 1）の理念や方法についてエスノメソドロジーの手法を用いて調査を行った。

2 件目は、2008 年 7 月、「海外アカデミック・ディスカッション」の助成を受け、Springs Dance Company というイギリスで活動を行うクリスチャンのプロフェッショナルコンテンポラリーダンスカンパニーのサマースクールに参加し、参与観察と参加者へのインタビュー調査を行った。帰国後、グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を用いて、クリスチャンダンサー（参加者）のワークショップへの参加目的とそこで行われた様々な舞踊活動による身体意識・感情の変容について検証を行った。

これら 2 件の事例調査により、①クリスチャンダンサーに共通する舞踊理念として、祈りによる聖霊の導きを動きの源泉としていることが明らかになり、また、②参加者は舞踊体験を通して、心身の癒し、神（聖霊）との繋がりを感じ、そうした気付きが自己理解・他者理解・踊ることへの自信を生じさせていることが明らかになった。これは金子の言に依拠するならば、参加者は舞踊活動を通じて「霊性」を高められ、「聖なるものとの出会い」「真の自己との出会い」（註 2）を内的に経験していたのではないかと考察することができ、こうした舞踊体験が神との関係における自己を認識すること、すなわち「アイデンティティの構築」に寄与している可能性が示唆された。

2. 海外調査研究の必要性と目的

ここで、いくつかの課題が残された。①「ダンスにおける聖霊の働き」に関するクリスチャンダンサーの思想を明らかにすること、②具体的にどのような舞踊活動がどのような身体意識や感情の変容をもたらすのか、という点についてさらに検証を行うことである。

そのためにはクリスチャンによる舞踊活動が稀にしか見られない国内での研究は困難であり、国外でクリスチャンによる舞踊活動が活発に行われる場へ行き現地調査を行う必要があった。こうした必要から、筆者は Christian Dance Fellowship of Britain（以下、CDFB と略記）というイギリスにおけるクリスチャンのダンス組織が主催する、International Christian Dance Fellowship（以下、ICDF と略記）という国際的なクリスチャンダンス組織に着目し、今回の「海外調査研究」の助成により、現地調査を行うことが可能となった。ICDF は、3 年に 1 度開催され、国境を越えてあらゆる国のクリスチャンダンサーが集い、キリスト教的視点から舞踊を中心とした創造的芸術表現について探求し、親交を持つことを目的とした活動である。今年は、イギリス北部、スコットランドの St Andrews University にて行われた。

本調査の目的は、①イギリスにおいて「宗教」「教

会」という枠を超えて活動を行う CDFB の舞踊活動の実態調査、②ICDF に講師として参加しているクリスチャンダンサーの舞踊思想に関する調査、③ICDF に参加するクリスチャンダンサーの参加目的と、舞踊体験によるダンサーの身体的・内的経験が動きのアイデンティティ形成にどのように寄与しているか、ということについて調査を行うことである。

3. 調査方法

① 参与観察（記述による記録、ビデオ収録）
これにより、プログラムの流れ、参加者の内訳、各ワークショップの状況を記録した。
② インタビュー調査
ICDF の設立者 1 名、研究者 1 名、講師 5 名に対して半構造化インタビューを行った。研究倫理に関する誓約書を提示し、インタビュー内容はすべて IC レコーダーに録音し、大まかに記述による記録も同時に行った。
③ 質問紙調査
参加者 4 名に対して質問紙を配布し、回答を依頼した。質問の視点は、現在行っている舞踊活動、ダンスムーブメントと聖霊の働きに関する思想、カンファレンスへの参加動機、ワークショップにおける身体意識・感情の変容についてである。
④ 配布資料、文献、ビデオ資料の検証
今後、各カンファレンスで配布された資料、その状況を記録したビデオ資料、各講師が販売する書籍・DVD の検証を行う。

4. ICDF 概要

今回、海外調査研究の対象としたICDFについて、現地調査により入手した資料から以下の点が明らかになった。

4ー1 ICDF の理念と目的

ICDF は、クリスチャンダンサーの国際的組織であり、主な目的は「奉仕と宣教において身体表現によるアートを導入すること」にある。その目指すところは、教会内においては、エクササイズやコミュニティでのダンスを取り入れることにより礼拝や祈りにおける「自由・癒し・喜び」を増し加え、霊的探求（spiritual exploration）のためのツールとすることであり、また、教会外の人々にたいしても「美・人生の意味・癒し」を含む価値のあるメッセージを発信することを目的としている。

このことから、ICDF は舞踊の価値を単に「楽しみ」という要素として捉えるのではなく、「心身の解放」「癒し」「霊的探求」というように多面的に捉えていること、またその活動は教会内のみに向けられているのではなく、教会外の人々を視野に入れた取り組みであることがわかる。つまり、こうして、「ダンス」という文化的・創造的・非言語的ツールを用いることにより、「教会」「国」「文化」といったくくりを越えて世界中の人々が結集し、神にある Unity（一体感）を形成することをめざしていると考えられる。

4ー2 ICDF の歴史

ICDF は、1988 年、Christian Dance Fellowship of Australia International conference としてオーストラリアで始まった。設立者は、オーストラリア出身の Mary Jones という女性である。発足当時、オーストラリアだけがクリスチャンのダンス組織をもつ唯一の国であったため、国際的な組織にしたところで、どれほどの参加が見込まれるか検討もつかない中でのスタートであったが、結局世界中からおよそ 100 人に及ぶ参加者があった。これにより、彼女はクリスチャンのダンス組織を国際的な規模でネットワーク化する必要性と義務を感じ、新しいクリスチャンフェローシップをつくるべく活動を進めた。それ以降、ICDF への参加国は 30 カ国以上になり、世界中から多くのクリスチャンダンスカンパニー、教会グループ、組織が結集している。

ICDF 初年はオーストラリア（1988 年）で開催され、その後イスラエル（1991 年）、イギリス（1994 年）、南アフリカ（1997 年）、オーストラリア（2000 年）、アメリカ（2003 年）、マレーシア（2006 年）、そして今年はイギリス北部スコットランドにて開催された。ICDF 発足から 21 年が経ち、教会における芸術活動の成長、国際化、インターネットの普及により、ますますクリスチャンのダンスネットワークは拡大し、状況が変化してきているといえる。

5. ICDF2009 実態調査の結果

今年の ICDF 参加者は、約 220 名であった。参加国全てを把握することはできなかったが、筆者が把握する限りでは約 20 カ国の参加であったと思われる。その内、日本からの参加は筆者 1 人であった。男女比はおよそ女性 8 割・男性 2 割、4，5 歳の幼児から 70 歳代くらいの年配の方まで世代は様々であったが、20 代から 40 代の女性が中心であったと思われる。

カンファレンスは 7 月 11 日～17 日に渡って行われ、一日にワークショップが 3 回、午前と夜に礼拝が行われた。礼拝では、各自が即興的に踊る自発的なダンスとソロやデュエット、また国ごとのパフォーマンスも行われた。筆者は、イスラエル出身の女性 1 名とカタール出身の男性 1 名と組んで共に創作をし、作品を発表する機会に恵まれた。創作過程で言語の壁を感じることもあったが、共に創作をするということは、すなわち互いの性格や背景にある文化を認め尊重し合うプロセスであり、「日本文化」を背景にもつ自分のアイデンティティを強く意識する機会となった。また、舞台上でのパフォーマンス後、「あなたの表現を通して神の臨在を感じ、恵まれた」という内容のコメントを多くの観客からいただいた。それは筆者の「身体表現」が筆者自身の信仰を反映していたのか、それとも「観客の見方」によるものなのか、その両方かもしれないし、それをここで明らかにすることはできないが、それはともかくとして、

国際的な場でメッセージを発信する際に、非言語的・文化的情報伝達ツールとして舞踊が大きな価値を持つことを深く認識する機会となった。

ワークショップは、全部で 73 種類あり、各ワークショップのテーマからその内容を以下のように分類したところ、以下のように凡そ 12 種類に分類することができた。①旗やリボンを用いたワーシップダンスを習得するクラス：14 種類、②エクササイズやテクニックを習得するクラス：11 種類、③異国のフォークダンスを体験するクラス：12 種類、④創作手法や自分の動きを発見することを目的としたクラス：6 種類、⑤コミュニティダンスのクラス：2 種類、⑥メディテーションのクラス：2 種類、⑦ダンスセラピーのクラス：2 種類、⑧子どもへのダンス指導方法を習得するクラス：2 種類、⑨障害者向けのダンスを習得するクラス：2 種類、⑩ダンス以外のアート表現を習得するクラス： 7 種類、⑪様々な国におけるアートを用いた礼拝や宣教活動を紹介する講義形式のセミナー：9 種類、⑫分類不可能：4 種類、であった。この結果から ICDF の特徴としていえることは､娯楽、癒し、文化的表現、美、霊的探究、自己アイデンティティの探求など、舞踊を様々なかたちで提示することにより、文化、性、世代、プロフェッショナル／ノンプロフェッショナル、健常者／障害者、というあらゆる「差異」を越えて、あらゆる人々が様々な角度から舞踊に触れ、その価値を体験することができるように組織されているということである。これにより、舞踊のもつ多面的な価値を深く再認識することとなった。

筆者は、以下の 6 つのワークショップを受講し、参与観察を行った。

① ‘Somatics:Personal Wholeness, Dance Expertise and Body Awareness’（身体：個人の全体性、舞踊の洗練､身体の気づき)､② ‘Discovering your movement identity in God’（神にある動きのアイデンティティの発見)、③ ‘Finding your movement identity and creativity’（動きのアイデンティティと創造性の発見)、④ ‘Harmonics’（調和)、⑤ ‘Bharatanatyam: South Indian Classical dance on Christian themes’ (バラタナーティヤム：キリスト教的テーマに基づく南インドの古典舞踊)、⑥ ‘Oriental Dance’（東洋の踊り)、である。まず、単純に⑤や⑥のような異国の舞踊を体験することは筆者にとって非常に新鮮であり、それだけで興味深い内容であった。⑤では、一つ一つの動きへの集中力と静謐な心の在り方が求められ、一方、⑥では⑤の動きとは全く異なり、小刻みに足腰を震わせる動きが基本となっていた。まずそれらの動きを習得するのに苦労したが、次第に慣れてくるにつれてそうした「震え」の動きが一種のトランスのような状態を引き起こしているようにも感じた。筆者以外の参加者も各国の舞踊スタイルの独自性と動きを楽しみながら、各講師が「一つ一つの動きを信仰によってどう捉えているのか」ということに興味を示し、積極的に質問をしている姿が印象的であった。また、④の ‘Harmonics’ では、身体を外的（重力）・内的(身体の各間接の可動域や接合性、左右の対称性、エネルギー供給、感覚刺激に対する反応・反射など)にみつめ、その「調和」を感じる作業を行った。さらに、手を繋ぎ円になって踊ることを通して､「何を感じたか」について議論を行い、「人の手が温かいと感じた」「回っているときに風を感じた」「目と目を合わせることが大切であると感じた」などの意見が出た。筆者は、自らの身体が神の創造した世界において完全なる「調和」の中にあり、それは自分の「内」を見つめるだけでなく、自分を取り囲む「世界」を感じることで気付くのだということを、認識した。

また、①②③に関して、興味深いのは講師のもつ身体観・舞踊観であった。①は、聖書に基づく人間の全体性、すなわち「身体・魂・霊」の統一を目的としたメディテーション系のワークを中心に、身体の各部位、細胞の一つ一つに集中して身体感覚を研ぎ澄ます作業を行い、自身の身体を通して何を感じたか、何を経験したか、ということについて議論した。そして、②③では、ラバンのムーブメント・システム（註 3）を用いて創造的な動きを模索したり、自由に動くことができないことの理由として、「自分の目の前にある鏡」、つまり外見に捉われがちであることを指摘され、そうではなく「聖霊の宮」（註 4）である身体に宿る「霊」によって動くこと、身体を酷使するのではなく身体を愛すること、身体が感じるもの一つ一つを愛すること、などの指導を受けた。①②③のワークでは、動きを通して内面を動かされ涙を流す参加者が多くみられ、徐々に動きを通して心身が解放されていく様子がみられた。

①～⑥のワークショップを参与観察し、講師が舞踊に関する専門的な知識とともに、自らの信仰に基づく独特の舞踊思想を持ち、それにより参加者の内面に触れ、動きを自然に導き出すスキルを備えていることがわかった。このことは、舞踊研究者が舞踊教育者として現場で活躍していく上でも大切な事柄であり、筆者にとって大変有意義な調査となったといえる。

そこで筆者は、各講師の舞踊思想についてインタビュー調査を行った。

6. クリスチャンダンサーの舞踊思想に関するインタビュー・質問紙調査

当初の予定では、インタビュー内容を講師のみに限定していたのだが、幸いにも ICDF の設立者である Mary Jones 氏がインタビューの依頼に応じてくださり、その他にもまた、「教会における舞踊」の研究をされている方を紹介していただき、結果的に ICDF 設立者 1 名、研究者 1 名、講師 5 名を対象としてインタビュー調査を行うことができた。また偶然にも、「ローカルチャーチにおける舞踊活動」につ

いて研究をされていたという講師の方にもお話を伺うことができた。インタビュー方法は、半構造化面接の形式をとった。Mary Jones 氏には、「ICDF 設立の動機」「ダンスと聖霊の関係性」「クリスチャンダンサーがテクニックを習得することの必要性と意義」などについてお話を伺い、また、各講師の方に対しては、「現在教会内外で行っている舞踊活動」「教会において舞踊活動を行う意義」「創作のインスピレーション」「ダンスにおいて聖霊が働くときの身体・感情の変容」といった内容について詳しく思想を伺うことができた。さらに今回、4 名の参加者に質問紙調査を行い、「ICDF への参加動機」「ダンスにおける聖霊の体験」「ワークショップによる身体・感情の変容」といった内容について調査を行った。特に、彼らの舞踊活動において「聖なるもの」すなわち「聖霊」をどのように認識しているかということについて貴重な言説を得ることができ、このことはクリスチャンダンサーが神との関係における自己を認識することでもあり、それは舞踊における動きのアイデンティティを構築していく過程で重要な点であると考える。今後のデータ分析の中で検証を行い、これまでに現地調査を行った 2 件の事例の結果と合わせて、クリスチャンダンサーが捉える「聖なるもの」と動きのアイデンティティ構築との関係性として博士論文にまとめる予定である。

また、今後は昨年の海外アカデミック・ディスカッションの助成により現地調査を行った Springs Dance Company のワークショップ受講者へのインタビュー調査から明らかにしたことを「舞踊学会」で発表し、今回の海外調査研究により明らかにした ICDF の理念・歴史・活動内容及びインタビュー・質問紙調査結果については、「舞踊学」「人間文化創成科学論叢」へ投稿する予定である。今回の海外調査研究により、自身の研究テーマについて、他国のクリスチャンダンサーとともに「身体」を通して探求し、さらにインタビュー調査や日常会話の中で議論を行うことができたという点で、筆者にとって大変意義のある機会となった。この調査により得た成果を今後の研究活動に活かしていきたいと思う。

【註】

1. 「ワーシップダンス」という用語について明確な定義はなされていないが、本研究では「神への思いを表現しようとする者によって、あらゆるスタイルで踊られる、礼拝としてのダンス」という意味で用いる。
2. 金子晴勇著「人間学から見た霊性」(2003) 教文館、東京、p.68.
3. 舞踊者自身が届く範囲の内ですべての可能な運動を含んだ領域を、方向（前方・後方・横方)、レベル（低く・高く・中間)、エネルギーの程度（強い・弱い・普通)、速度（ゆっくり・普通・速く)、運動の拡散と収縮といった概念を用いてシステマティックに示したもの。
4. 「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。」新改訳聖書（第 I コリント 6：19）

【参考文献】

ファン.デル.レーウ,G.著，小倉重夫訳「芸術と聖なるもの」（1980）せりか書房，東京.
金子晴勇著「聖なるものの現象学」(1994) 世界思想社、京都.
金子晴勇著「人間学から見た霊性」(2003) 教文館、東京.
小野寺功著「聖霊の神学」(2003) 春風社.
片岡康子著「舞踊学講義」(1991) 大修館書店、東京.
Marilyn Daniels ‘the dance in Christianity-A history of religious dance through the ages’ Paulistpress, United States of America.

かわた　まり／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻
表象芸術論領域　博士後期課程 2 年

【指導教員のコメント】

河田は、クリスチャンの舞踊活動に関する研究を進めているが、この分野は先行研究がほとんどなく、またワーシップダンスは欧米に発し、その形態も多様であることから、海外での事例研究を積み重ねることが必要である。これまでに、ロサンゼルスでは黒人文化におけるワーシップダンス、ロンドンでは白人文化におけるワーシップダンスのワークショップに参加し、ワーシップダンスの聖性について考察してきた。今回は、これまでの研究過程で浮上してきた次の課題、「クリスチャンダンサーの霊性や意識変容」に取り組むために、海外調査研究の助成を得て、スコットランドで行われた International Christian Dance Fellowship に参加し、参与観察、インタビュー、質問紙調査、文献・ビデオ等の資料収集を精力的に行い、現在、それらの整理、分析を進めている。まだその途上であるが、今回の海外調査研究が、学位論文の核となる「『聖なるもの』と動きのアイデンティティ構築との関係性」への思索を深めるものとなったと思われる。派遣学生は、平成 20 年度の海外派遣アカデミック・ディスカッションと本年度の海外調査研究の機会を得て、着実に研究を積み重ね、学位論文に向けての成果をあげたものと認められる。

（お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　教授　柴 眞理子）